

# 東京家政学院 図書館報

平成16年3月5日 第50号

発行者 東京家政学院  
大学附属図書館  
〒194-0292 東京都  
町田市相原町2600  
電話 042(782)9815  
印刷所 (株)高尾印刷

中中中中中中中中

## 「問題解決技法」と図書館

天野 恒男

中中中中中中中中

記念すべき図書館報第50号発行に際し、日ごろ考えている一端を述べてみたい。

世の中には、複雑、多様で解決の困難な「問題」が山積している。人間は遠い昔から生存、安全、そしてより良い生活環境の確立を目指して、「問題解決」に知恵を絞り、それなりの成果を得てきた。問題解決とは「望ましくないこと」を排除し、「望ましいこと」を促進する活動のことである。

今日の社会・経済環境は複雑多岐な問題を生み、その解決はいっそう困難になっている。それは社会・経済環境が絶えず変化し、過去の経験、あるいは知識偏重からは判断することが容易ではないからである。今は想像を絶するような環境変化が起こり、扱う情報量



は膨大なものになっている。知識はすぐに陳腐化し、知恵を出さなければ問題解決は難しい状況にある。しかも意思決定は少しのミスを許さず、先送りできない厳しさを伴う。

こうした状況下で手を拱いていられない。昔から「名人」といわれた人たちは、難しい仕事でも適切に判断し、その進め方の段取りが上手で、周囲の信頼を得てきた。しかし、そのプロセスは「ブラックボックス」になっていて、内容を他人が覗くことはできない。そのため技術を共有化するにはほど遠く、名人芸を盗むには時間がかかりすぎるなどの制約が生じる。しかし、今日求められるのは、このブラックボックスを一つの思考技術としてそのプロセスをシステム化し、習得することができないかということである。それが「問題解決技法」である。いずれこれを制度的に学習できるようにする必要がある。

問題解決技法では、まず無意識のうちに築かれた自分の考え方に

固執しないで、多様な価値観を認める柔軟な姿勢が必要である。そこから自分自身の「質」を高める努力をする。それは、自らの信念やビジョンを確立することであり、社会情勢や哲学、芸術に広く関心を持ち、見識を磨き、必要に応じて自ら発信できるようにすることの意味する。加えて、自分の専門領域を確立することが重要である。それぞれが培った専門的な知識・技術の実績によって問題解決に資することができるからである。ほかにも、知的好奇心、行動力などが問題解決技法の背景として求められるものである。

こうした問題解決には図書館が大いに役立つ。問題解決における情報収集は、情報の宝庫といわれる図書館の活用が挙げられる。文献、雑誌、資料その他多くの資料にあたることができるからである。図書館内部に限らず外部ウェブサイトにアクセスが可能な図書館環境だから利用価値は高い。外部の情報源からもインターネットを通じて各種情報を収集できる範囲と量は増加しつつあり、問題解決に有利となる。情報収集の際、図書館のレファランス機能が役立つ。図書館の役割はサービスを提供することにあり、それを最大限活用することを忘れてはならない。

図書館情報活用システムをフルに生かすのは人の知恵である。問

### 第五十号 目次

「問題解決技法」と図書館 天野 恒男

刊行50号によせて 小口 悦子

版画入り本耽溺 原口 幹雄

「大江文庫を翻刻する会」について 大江文庫を翻刻する会 関原 暁子

刊行50号節目のできごと

図書館から 情報流通業 森田 裕

本学教員寄贈図書紹介

未来技術を語る2冊の本 岡本由紀子

図書館は曼陀羅の世界 伊藤真奈美

資料の紹介

毘沙門堂本 古今集注 前田 雅之

問題解決技法を学ぶことは、同時に図書館を活用することにはかならない。知的好奇心を高め、学習への意欲的な姿勢が望まれるところである。

(附属図書館長)



## 本の周辺

# 「版画入り本耽溺」

原 口 幹 雄

版画入り本を集め始めて数年が経つ。最初は版画そのものの蒐集から始まった。ある古書店に飾ってあった畦地梅太郎の大きな版画を強引に譲ってもら

ったとき、「畦地版画がお好きなら燕岳の燕山荘に行つてごらんなさい」と言われ、早速その夏燕山荘に行つて畦地の山の版画を堪能し、これからは山の版画を集めようと思った。それ以来、畦地版画を中心に、金守世士夫

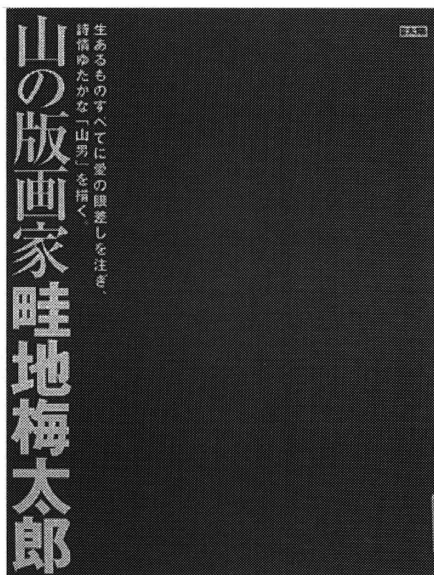
から版画入りの本に切り替えた。これならいつでも簡単に見ることが出来る。畦地の「山の絵本」、前川千帆の版画が入った田中冬二の「故園の歌」、川上澄生の「アラスカ物語」、芹沢銈介の型染め「絵本どんきほうて」などの大型本から前川の「閑中閑本」シリーズ、武井武雄の刊本作品など豆本に至るまで手を出し始めた。

しかし、版画は飾るのにも収納するのに場所を取りすぎる。例えば、金守の「湖山幻涵」に至っては縦横70センチ、厚さ15センチの木塗り箱に入り、引き出すたびにギックリ腰になりそうな重さで、おいそれと見ることもできない。そこで、主力を版画そのもの

の版画湖山シリーズ、往年の山の雑誌「アルプ」の表紙絵などを担当した大谷一良の山と湖の版画などを集中的に購入した。

そのうち木版画のみならずエッチング（銅版画）入りの本にまで広がり、横田稔のエッチングが入った堀口大学の「月光とピエロ」を皮切りに、横田が主宰する草原社刊行の本はもとより、横田のエッチングの入った有名無名の詩人や作家の本などを片っ端から集めた。挙句の果てには本だけに止まらず、横田の百号の油絵「悪魔ちゃんいらっしやい」を筆頭に10枚余りの油絵までを購入するなど、われながら正気の沙汰ではない。

こんなことができたのは、わたしたちが似た者夫婦だからである。妻はわたしよりも登山歴が長く、今でもあっちこちの山に登りに行っている。生前の畦地梅太郎画伯にも会いに行つており、横田稔、大谷一良両画伯とはわたしよりも親しく付き合っている。



さて、この3月に定年退職したら、心を入れ替えて神保町界隈から遠ざかろう。そして、アームチエア・クライマーを決め込んで、山の版画や版画入り本を手にと

れまで登ったアルプスの峰々を想い出しながら、ゆっくり楽しんでみよう。

(人文学部教授)

# 「大江文庫を翻刻する会」について

光塩会 大江文庫を翻刻する会

本学附属図書館には、「大江文庫」と呼ばれる特殊コレクションがある。これは、家政・家事(衣・食・住) 礼法・女子教育・往来物・女子往来物(合冊本)等の江戸時代に出版された版本を中心に収集されたものである。

で調べていたが、これも回を重ねる毎に著者の字くせを覚え読める様になって来た。

翻刻に当たって次の通りの取り決めに従って今後は作業を行うことになった。

## (一)大江文庫本の選定

原本は貴重な古文獻であるので、貴重書庫に保存されている。学生並びに学内研究者に是非利用して欲しいと、複製版を作成し、大江文庫コーナーの書架に排架してある。変体仮名で書かれているので、学生には馴染みが薄く、折角の資料も利用者が少ない状態であった。

①文字が良いこと ②比較的大きな文字 ③分量のあまり多くないもの ④易しい内容のもの ⑤ところどころ漢字の混じっているもの

昭和五十二年、当時の古井始子図書館事務部長が、同窓生の秋山様、飯泉様に大江文庫のお話しをしたところ、学生さんのお役に立つことならばと、変体仮名を現代の活字に写し変える仕事(翻刻の作業)を、光塩会(同窓会)の文化部の皆様に呼び掛けてくださり、この会が発足したのである。

(二)大江文庫翻刻用原稿用紙を準備する。ペンかボールペンを使用 (三)写し損じた場合の消す為の用具 (四)翻刻にあたっての注意

先づ字が良い「料理物語(寛永二十年刊)」を全員コピー本を持ち

①一字一字原本の文字を押さえながら写していく ②原本の感じを生かすこと。挿絵のある場合はコピーをし、原本に近い位置に貼付ける。

二十年刊)を全員コピー本を持ち

③清書のための原稿用紙にじかに書くこと。下書きをしたものを写さないこと。これは写し間違いをふせぐ為で一字一字丁寧に書き入れる。

翻刻が始まった。「変体仮名字典(祐野隆三編)」を各自購入し、わからない字は、この辞書と首引き

④分からない文字は□とする。 ⑤虫くさい、破損で読めない時は□とする。

⑥原本の誤字・脱字等により翻刻の際の間違いと判断されるおそれのある箇所には右側に「楊」と入れる。

(五)翻刻者は原稿が完成したら「大江文庫を翻刻する会」へ提出する。

(六)翻刻者以外の会員二名の組合せで読み合せ(校正)をする。

(七)校正の終了したものは図書館へ寄贈する。

(八)図書館では一部コピーをし(保存用)、オリジナル原稿を製本し、整理して複製本と並べて配架する。

翻刻は地味な仕事なのでどの位置が続くかと心配したが、無理をせず、あせらず、興味を持ち、楽しみ乍らの会の進め方が良かったのか気が付いたら今年で二十八日目を迎える。現在の会員数は二十八名、先輩方もご高齢になり会員の平均年齢は七十五、六才になろうか。例会にはお出になれなくても、ご自宅で翻刻をなさっている。

毎月第一月曜日と第三月曜日に三番町キャンパス光塩会二階会議室で翻刻の会が行われている。常に十四、五名は出席される。

第一月曜日は全員同じテキストを持ち一丁(一頁)毎、全員で三回音読をする。

ながら読む。二回目は漢字・ルビ等を読みあげる。三回目は文章が分かる様に通読する。そして次丁(次頁)へと進む。

第三月曜日は翻刻が出来上がった原稿の校正をする日。会員の個人個人が興味を持ち翻刻した原稿を翻刻者以外の会員が二名づつ、組んで原稿と原本を相互に持ち声を

出して読み合せをする。

会員の中には八十才以上の先輩がおられるが、お元気に毎回出席なさり、電子辞書をご持参になり分からないことは調べて教えて下さる。又「これはどういう意味かしら」とか「江戸時代には、こんな字を使っていたかしら、当て字ではないかしら」等と質問が出る

と、色々な辞書で調べていらした方が教えて下さった

り、「ちょっと待って調べてから」と云い調べたりと、皆和気あいあいと楽しみながら翻刻している。

常に机上には「くずし字用例辞典(児玉幸多編)」「漢字異体字典」「大字典」「広辞苑」等が用意されている。

料理本を翻刻なさった方は「自宅で書い

てある通りに作って見たので皆さんお試食して見て下さい」とお持ちいたゞいたこともあった。

又、毎年一月は新年会を兼ねて会が開かれる。その時に各自品物を持ち寄り交換会を行うが、その品物に必ず異体文字を添付する事がきめられている。その異体文字を黒板に板書し、皆で読み当てる。

始めはゲーム感覚であったが、年月が立つとその異体文字も三百字位になっている。このまゝにしておくのは惜しいので何とかしたいと考えている。

現在翻刻本は百三十種になっているが、大江文庫本のほんの一部に過ぎない。まだまだこの会が長く続くことを切に願ってやまない。

(廣澤記)



# 大江文庫目録の電子化について

—江戸時代編—

## はじめに

昭和35年(1960)頃から資料収集を始め、昭和48(1973)に創立50周年記念に大江文庫目録—江戸時代篇—が刊行され、学外に広く紹介された。

その後増加した資料を加え、改訂増補大江文庫目録として主題別に図書館報掲載および図書館報別冊の形で昭和62年から刊行し現在に至っている。

しかし新しく増加した資料も含め最新の所蔵データの目録が必要と考え電子化作業を進めた。作業は所蔵タイトルの一覧を優先させ、詳細データは入力ソフトが一覧表形式のためデータの一部しか表示させていない。現在試験運用の段階だがホームページ「大江文庫」でタイトル一覧が利用できる。

## 利用公開について

貴重資料を電子化して公開を考えた場合、冊子体の目録に比べれば検索手段も多様になり利用の対象が広がる。江戸期の版本は「書名、別書名、ヨミ、漢字の旧漢字や異体字の扱い等」解かり難い点が多い。図書館のホームページ上に公開する以上は研究者だけでなく、一般学生にも利用し易いよう配慮したい。

## データの状況

現在は、EXCELでデータ入力を行なっている。

EXCELで作成する<利点は>

- 1、単純な一覧表の形なので、分かりやすい
- 2、標準的なソフトウェアなので操作方法を多くの人知っている。
- 3、標準的なソフトウェアなので、他のソフトウェアへ移行も容易である。

<欠点としては>

- 1、一覧表の形しか無いので、目録の詳細はデータ量が多くなり見難い
- 2、インターネット上での検索機能が無い事

<これから>

インターネットに公開する以上は書誌情報の検索は不可欠と考え、インターネットでの公開機能を持ったデータベースソフトでの導入を進め切り換えていく。

そのためには情報処理センターの協力を得、次のような問題を解決していきたい。

- 1、ホームページ公開用のサーバーの問題
- 2、検索のためにサーバーの操作を行なう形になり、セキュリティの問題がある。

情報処理センターと十分に検討する必要がある。

## 画面の構成

### タイトル一覧

「書名」・「ヨミ」・「刊年」のデータを書名50音順に並べたものである。

タイトル一覧から、詳細データ一覧にリンクをはる。分類タイトル一覧

現在「食(料理)の部」からスタート、刊本を優先してデータ入力している。

### 詳細一覧

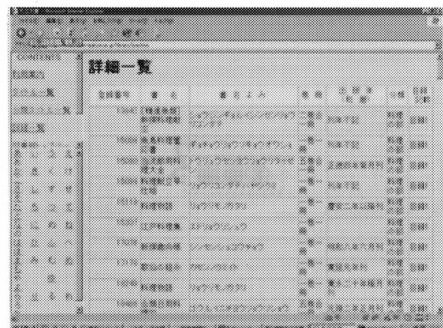
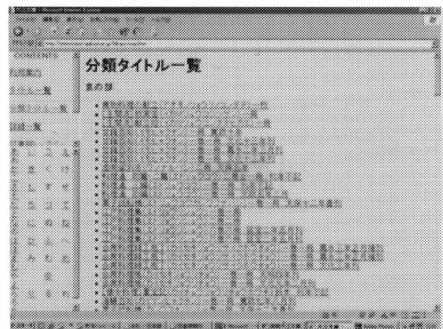
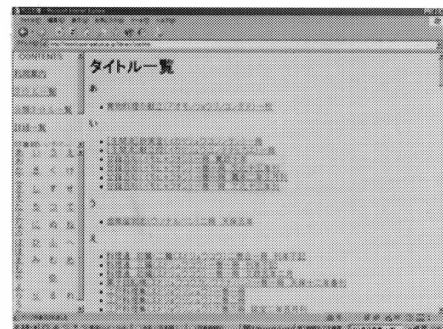
とは、「登録番号」・「書名」・「巻冊数」・「刊年」・「複製版/翻刻版の有無」のデータを50音順に並べたものである。

## 凡例

見出し書名：巻頭書名を採用しているが、別書名からも検索できるようにした。

漢字：書名は新字を採用した。

書名ヨミ：国書総目録(岩波書店刊)、女子用往来刊本総目録(大空社刊)等を参考にした。



関原 暁子 (情報サービス課長)

# 図書館報、刊行50号 節目のできごと

本号で図書館報は50号になりました。創刊号は、オイルショックが世界を覆った一年後、昭和49年（1974年）11月15日に誕生しました。創刊号の巻頭言で田中初夫館長は、図書館の現状業務の報告にとどまらず、図書館の本来の目的である大学の教育研究のための材料紹介を図書館報で行ないたいとし、刊行された「大江文庫目録江戸時代篇」に触れています。

その後の30年を、10号ずつたどってみました。

創刊号：昭和49（1974）年11月15日

第10号：昭和53（1978）年

2月28日：

- ・この年成田空港開港
- ・学院では大江スミ逝去30周年記念会を開催



第20号：昭和57(1982)年3月31日：

- ・この年東北・上越新幹線が開業
- ・学院では町田校舎起工

第30号：昭和63（1988）年6月15日：

- ・この年トロントサミットで地球温暖化が議論され環境議論の転換点となる
- ・学院では人文学部が設置され図書館・講堂棟が竣工



第40号：平成6（1994）年3月15日：

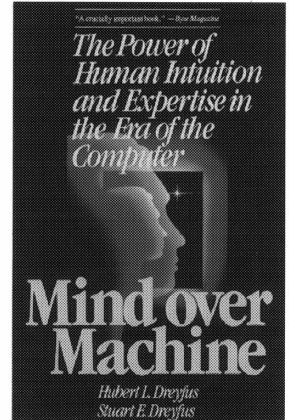
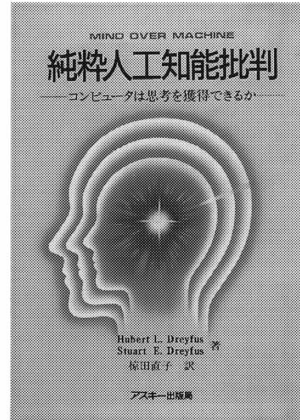
- ・1月に、前年始まったJリーグのシーズンが終了、ヴェルディ川崎が初代チャンピオンになる
- ・学院では大学院人間生活学研究科設置

## 「未来技術を語る2冊の本」

岡本由紀子

2冊の本について書いてみたい。一冊は1987年出版の『純粋人工知能批判』（原著は『Mind Over Machine』）で、著者のH・ドレイファスはアメリカの哲学者である。カントの『純粋理性批判』をもじった邦題で訳文も読みやすく話題を呼んだ。もう一冊は1997年に書かれた『Remaking Eden』だ。分子生物学者リー・シルヴァーの描くクローニングを含めた生殖技術、遺伝子工学の未来はさながら「神への挑戦」だ。（邦訳は『複製されるヒト』だが、私だったら『改造版エデン』とするところだ。）

一方はコンピュータ科学で、他方は遺伝子工学と、分野は違うが、どちらも先端技術をもたらす「ぞっとする未来像」を描こうとしている。しかしドレイファスの結論は、コンピュータはたとえどんなにエキスパート・システムを開発しようとしても人間のエキスパート（達人、熟練者）を超えることはできないというものだ。なぜなら経験と勘は人間のエキスパートの本質的特性であるが、それらは直観的な部分でプログラム化できないからだ。実際のところ、特に期待された軍事的エキスパート・システムも不成功に終わったらしいことが昨今の世界情勢から推察できよう。直観はもっと尊重されるべきだが、目下のところコンピュータに支配される恐ろしい未来像は影をひそめている。しかし『複製されるヒト』の先端技術の場合はそうはいかない。クローニングを含めた先端的生殖技術と遺伝子改良技術の未来はどうなるのか？

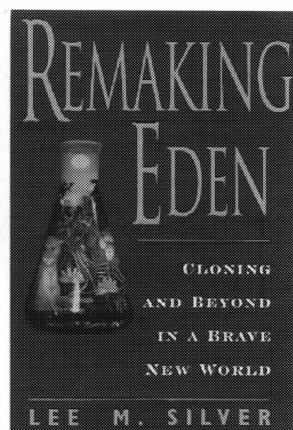
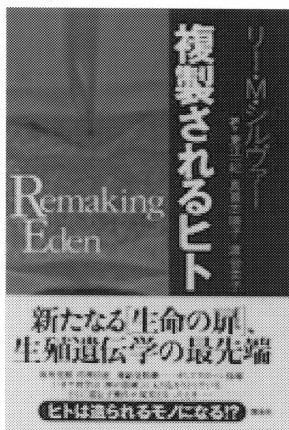


純粋人工知能批判—：コンピュータは思考を獲得できるか  
ヒューバート・L・ドレイファス、スチュアート・E・ドレイファス著；椋田直子訳  
東京：アスキー、1987.4 325,18P；20cm—（海外ブックス）  
ISBN：4871483665 本体価格 2,097円

どんな技術的限界も、子供を持ちたい、しかも幸福な人生をという親の願いを推進力としていずれ乗り越えられ、バイオテック企業の市場戦略はそれを後押しすると著者は予想する。「ヴァーチャル・チルドレン」がその未来像だ。

解読済みのヒト・ゲノムに基づいて、胚の段階で遺伝子（ジーン）改良が施され、重大な疾病からの解放はもちろん芸術的に身体的に知的に優れた特徴を備えるようデザインされる。その技術を利用できる富裕な人々だけが何世代にもわたって改良を続けジーン・リッチ階級を形成する。そこから排除される貧しい人々とは、ヒトとしての種すらも異なっていくという筋書きだ。遺伝子改良は五感にまで及び、犬の鋭い嗅覚、ウナギの発電器官の遺伝的特性の移植等までが可能となる。改造版エデンの話は遺伝子改良を累積し「特別な生物」となったヒトが自分たちの創造主と対面する場面でおわる。本の冒頭のシェイクスピアの『テンペスト』の一節がそれを暗示する。それこそ、テンペストに登場する醜悪なキャリバンの姿をした己自身だと。人類は10年でここまでできてしまったかと思わせる2冊だ。

（人文学部助教授）



複製されるヒト  
リー・M・シルヴァー著；東江一紀，真喜志順子，渡会圭子訳  
東京：翔泳社，1998.5 320，48，7P；20cm  
ISBN：4881356089 本体価格 1,800円

利用者にとって望ましい図書館をイメージする際に、「お客さま」「満足度」あるいは「ニーズ」といった、ビジネス用語でとらえてみると分かりやすいように思います。図書館を情報提供するサービス業と考えて、どのようなサービスが「商品」として提供されているかを眺めてみます。

#### ★図書館の商品

まず文献で代表される資料、視聴覚資料です。これらは普通書架などで提供されています。次にそれらから必要な情報を引き出すための目録などの仕組み、伝統的なカードやファイルされた目録、あるいはOPACやインターネットがあります。さらにそれらを使う環境、閲覧室や情報機器、コンピュータシステム、パソコンがあります。レファレンスなどの人をキーとした情報提供は最も付加価値の高い重要なサービスです。

これら商品が、お客さまである利用者のニーズに合う品揃えがされていてかつ品質が高く安定していること、必要なタイミングで入手できること、使いやすいことなどがサービスの要件となっています。

変化の少ない時代には、こうしたサービスを維持・充実してお客さまに提供することが図書館に求められるポイントであったと思います。図書館の使い勝手はお客さまが十分理解していたとも言えるでしょう。老舗とお得意さまの関係かもしれません。

#### ★変化と競争、情報流通業

図書館に押し寄せる変化の一つにデジタル化、ネットワーク化があり、図書館の商品に直接関わっています。また、さまざまな専門企業が新しいビジネスを展開して、図書館の業務そのものを引き受けるいわゆるアウトソーシングが行われるようになってきました。こうした中で、図書館のサービスのあり方も変化を続けています。一方、大学環境の厳しさを受けて、図書館は大学の強み・競争力の一つとして、従来以上の期待を担っています。

商品が変わり、お客さまが変わり、大学・図書館の環境が変わる中で老舗サービス業である図書館は、商品である情報とその仕組みの提供に加えて、積極的な商品情報の発信が不可欠になってきています。

何かを知りたい人が図書館に来て書架の間を巡り歩く。OPACで調べる、カウンターで尋ねる。「図書館に行けば」と思い浮かべば、いろいろな手立てで情報を探せるのですが、「図書館」が思い当たらない人もいます。また、一部の機能の利用経験しか無いかもしれません。

まずより多くのお客さまに足を運んでいただくための商品情報発信が出発点になります。いかにお客さまを増やすか。お客さまの潜在ニーズにヒットする情報は何か。あるいは「図書館に行けば、アクセスすればこんなことまでわかる(らしい)」、「もやっとした問題意識をはっきりさせられるかもしれない」、「図書館はこんなに便利だ」、といった評判を、いろいろな切り口の情報を継続的に発信して獲得する。そうして獲得したお客さまにはあたらしい期待があり、それをサービスに加えて「新商品」となるループができます。それをまた情報として発信するわけです。

#### ★情報発信

図書館の情報発信ツールの主なものには、図書館報、利用案内などの印刷物、ガイダンスやオリエンテーションなどのセミナー型のもの、ビデオやサイン、展示などのビジュアルのものに加えて、ホームページがあります。この中でホームページは5年を超え、図書館情報の基幹メディアとなっています。

ガイダンスは15年に続いてさらに開催回数を増やし、内容と方法の充実を図って「実践図書館活用」を目指しています。新入生を主として行っているオリエンテーションは3本目のビデオが幼児メディア研究室の協力等を得て、「ビデオ制作、放送学」の教材として完成、昨秋のKVA祭でお目見えしました。

情報流通業として図書館が行うことの第一は、情報発信の仕組みの充実です。情報発信の方針を立て、サービスを発信情報に組上げ、各種の発信ツールを組合わせたメディアミックスで実施する流れが、利用者増や利用スタイルにどう現れるか、たのしみです。

森田 裕 (情報管理課長)

### 本学教員寄贈著書紹介

平成15年度に寄贈を受けた本学教員の著書等を紹介いたします。ご寄贈いただきましてありがとうございます。今後も著作物出版の折にはご惠贈いただければ幸いです。

#### 早川 浩 (生活科学科)

小児科診察入門 第2版  
 メディカル・サイエンス・インターナショナル 1999  
 小児食事療法マニュアル 金原出版 1991

#### 境 新一 (人文学部)

現代企業論—経営と法律の視点—第2版  
 文真堂 2003

#### 金澤良枝 (生活科学科)

[完全版]糖尿病を治すおいしいバランス献立  
 主婦の友社 2003  
 1日1200kcalのやせる簡単メニュー  
 主婦の友社 2003

#### 高橋幸三郎 (人文学部)

知的障害児・者ガイドヘルパー養成講座報告書  
 一街に出よう サポートネット武蔵野 2003  
 成長するソーシャルワーカー 筒井書房 2003

#### 吉川晴美, 鈴木百合子, 三好明夫 (家政学部)

子育て・発達支援 一地域に開く大学として共に  
 育つ保育活動から 一第II巻  
 東京家政学院大学児童学研究室、  
 地域に開く子育て・発達支援研究会 2003

#### 芳賀 登 (理事長)

江戸の助け合い つくばね舎 2003



# 図書館は曼荼羅の世界

伊藤 真奈美

図書館の一般的なイメージといえば、本を読む・見る、借りる場所である。「広辞苑」にも「図書・記録その他の資料を集め保管し、公衆に閲覧させる施設」とある。

初めての「図書館」体験は小学校の図書室だった。図書室へと誘う黒光りの木製階段に足をかけた瞬間、異空間にトリップしたような感覚に襲われたものである。

本学に入学する前年、私は医大付属の短大に在学していた。立派な図書館もあったが、短大生も利用できる標本室を兼ねた小さな図書室があり、居合わせた医大生がこやかに色々説明してくれる。「これは鈍器で殴られた頭骨で、それは交通事故、あれは背中から剝がした刺青ね。」と額縁のかかった壁を指す。「骨格に興味あるなら本はあそこ。」かつて理科室で見た骸骨もここでは全て本物である。驚きとも諦めともつかない感情が押し寄せ、命を扱う責任と重大さに押し潰されそうになった。

短大を退学した次の年、本学に入学した。二度目の退学はできないという決意の中で出席した図書館オリエンテーションで、蔵書数や施設・設備が高校とは格段の相違があることや見慣れない多数の書籍を目の当たりにし、改めて大学生としての自覚やこれから始まる大学生活への希望と不安で胸が一杯になった。

実際には、冷暖房の整った快適な施設で、気分転換や時間潰し、憩いの場として、また「会社で全紙とってますから。」と新聞の勧誘を断る手段として、学生生活にとって重要な存在だった。友人と一緒に個人空間が確保され、読書やレポート、映画鑑賞に最適な場所であった。

学部2年の時、のちに指導教員となる先生から町屋の調査に誘われたのを契機に研究室に通うようになった。研究や授業準備の手伝い、ゼミ旅行の手配・卒研の手伝い、お茶出し等が楽しく、特にコピーは誰が頼まれるか友人と競争になったし、ブックランナーを頼まれると、前後の本や他分野の本棚も探し、関係ありそうな文献を勝手に借りて差し出したものである。この間に、図書館には勉学自習のためと研究のためとの二つの機能があること、文献の探し方や使い方を教わった。

4年生になって研究室に配属され、研究の世界に足を踏込むと図書館の利用目的はより明確になり、過去の文献調査と新着図書からの情報収集に絞られてくる。

他大学院に進学後も本学の図書館をよく利用した。台湾原住民族の伝統的集落と家屋を修士論文のテーマに選んだので、工学部の図書館よりも資料が充実していたのである。卒業研究を集団でさぼって図書館に避難している後輩達をなだめすかして連れ戻したりと、図書館が緩衝材としての役割をも果たしてくれていた。

助手になってからは、館内で長時間過ごすことは少々バツが悪く、思う存分使える学生が羨ましい限りである。

大学図書館は、情報化時代に伴う高度な情報手段を十分に活かすための訓練の場としても存在している。学生から「資料が見つかりませんでした」とよく言われるが、ほとんどの場合、探し方を知らないか根気良く探そうとしないことが原因である。そこで、資料探しの発端となるべく、本人が調べているテーマと関連のある本や論文などを2~3冊紹介することになっている。

情報洪水の現在、どの資料が自分にとって本当に価値があるのかを見極めることが重要であるが、私自身、必要な情報を逃しているのではと感じることがある。

最近では、卒業研究の参考文献欄に、URLを見かけることも多くなり不安を感じている。機械的な処理に頼ることで、論理的・解析的思考能力や判断力・想像力が妨げられ、個性豊かな人格の形成が損なわれはしまいかと危惧されるのである。ITは私たちの仕事や生活を強力に支援してくれるが、飽くまでも手段であって、決してこれが全てではないことを認識する必要がある。

図書館においても情報化が進み、図書カードをめくる作業がOPACでの検索にかわり、大変便利になった。

著作権の問題も残っているが、情報はいずれ100%電子化される方向に進むと思う。図書館に行き、ページをめくりコピーをとる業務が無くなり、自分の居室で全て事足りる日が来るであろう。今後、情報の中継基地として、図書館がどのような役割を果たしていくかが注目される。

地球の環境問題をも考えると紙の浪費も問題ではあるが、本棚に挟まれる充足感、未知の分野の書物をめくる時の新鮮さ、あっと驚くようなすばらしい一文に出会った時の感激、探し求めていた内容が記載された書籍を見つけ出した時の喜び、学生の寝顔、職員の方々の苦勞と優しさなど、図書館はまさに曼荼羅の世界である。思わぬ発想が生まれたり、自分の人生を変えてしまうような強力なインパクトを与えられることだってあるのだ。

私は図書館2階のフレームで囲まれた大きな窓が好きだ。中庭に面した広々とした空間で、大量の本に囲まれていると、まだ見ぬ世界が大きく広がってゆく。

(人文学部助手)

団体	老	居場所		憩い		男	個人
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大学</li> <li>・ 企業</li> <li>・ 行政</li> <li>・ 町内会</li> <li>・ ボランティア</li> <li>・ クラブ</li> <li>・ サークル</li> <li>・</li> <li>・</li> <li>・</li> </ul>	発見	レポート	勉強	研究	賃借	検索	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学生</li> <li>・ 教員</li> <li>・ 職員</li> <li>・ 卒業生</li> <li>・ 先輩後輩</li> <li>・ 地域住民</li> <li>・ 父兄</li> <li>・</li> <li>・</li> <li>・</li> </ul>
		未知	情報	映画	資料	新聞	
	快適	空き時間	雑誌	本	A V	7-11	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 休息</li> <li>・</li> <li>・</li> <li>・</li> </ul>
		睡眠	専門	一般	音楽	I T	
	若	キーワード	休憩	コピー	職員	期限	
		風景		ふれあい		女	

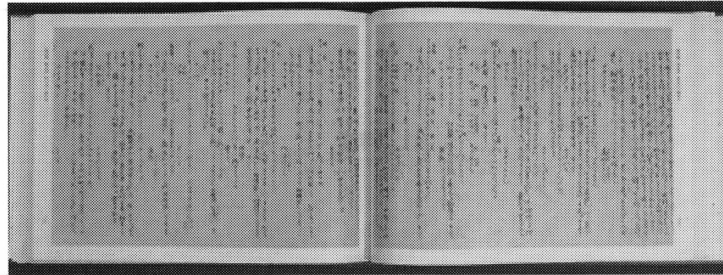
図書館曼荼羅

## 資料の紹介

# 毘沙門堂本 古今集注

前田 雅之

片桐洋一篇『毘沙門堂本 古今集注』  
八木書店刊



「古典」は、文学的・思想的価値があるから、今日まで読み継がれた書物ではない。何よりも価値の規範・権威としての聖典的書物が古典である。だが、古典にはもう一つ特質があった。それは注釈をもつ書物のことである。

日本において、聖典的役割を担い、注釈をもった書物はかなりの数にのぼるけれども、文学テキストに限って言えば、『古今和歌集』・『伊勢物語』・『源氏物語』・『和漢朗詠集』の四書にほぼ限定されよう。これを「四大古典」と言ってもよい。四書とも鎌倉期には古典となり、まさに汗牛充棟に及ぶ注釈書を有している。中でも『古今集』は和歌の聖典として、明治になって正岡子規に批判されるまで、古典中の古典として君臨した。

注釈と言えは、通常、語句の解釈といったことを想起するだろうが、前近代の知識人にとって、注釈とは、古典を仰ぎつつ、その本義に近づこうとする知的行為であり、自己の思想を表明する手段でもあった。簡単に言えば、学問だったのである。

古典的素養があることが一人前の大人の証と見られていた日本をはじめとする前近代の文明社会では、古典は楽しむものではある以上に、まずは学ぶべき教科書だったので。

今回採り上げる『毘沙門堂本 古今集注』（以下、『毘沙門堂本』と略す）は、片桐洋一氏が退職金を擲って買ったことで一部に名が知られた『古今集』注釈書の影印本である。本書の刊行以前に、『未刊國文古註釋大系』（図書館蔵）にも『毘沙門堂本』の翻刻が収められているが、翻刻ミスが夥しく正確な読み取りは不可能であった。だから、本書の刊行は快挙である。

氏によれば、本書は、比叡山延暦寺の脇門跡であった毘沙門堂に蔵されていた故にその名があり、成立は、鎌倉後期（十四世紀初頭）という。

膨大な『古今集』注釈書群のなかで、『毘沙門堂本』の特徴の一つは、現代人から見れば、荒唐無稽の一語で片付けられる秘儀的注釈が多く見出されることだ。

たとえば、『古今集』仮名序にある「この歌あめつちの開け始まりける時よりいできにけり」という一節の注釈で、『毘沙門堂本』は、日本の始源神を記している。

日本記ニハ無象神トイヘリ。

無象神という神は『日本記』（『日本書紀』）には存在しない。それに続いて、無象神について、  
無象神トハ天ニ五行ノ性アリ。此ハ虚空遍満周遍法界之躰也。此ハ色躰モナキ五行ノ性バカリアルナリ。此ニ五ノタマシキアリ。

と記す。これ以降、木・火・土・金・水（＝五行）の魂が天神の五神（通常は「天神七代」である）に化したと続ける。

今から見れば、これらは学問的意義のない出鱈目な説である。しかし、こうした説は、中世では、『日本記』・神祇書・『伊勢物語』注釈にもまま見られるものであり、注釈者がこれを信じていたこともまた言うまでもない。

本書から、古典の中世的受容の一端が知られようが、注釈者にとって、『古今集』は絶対的存在として仰がれていた。信仰と学問の無邪気で麗しい野合がそこにはあったのである。

その意味で、本書は、中世の思想世界を知る上で頗る価値のある〈古典〉なのである。

（人文学部助教授）